



# 中国残留孤児たちは今

## 第40号

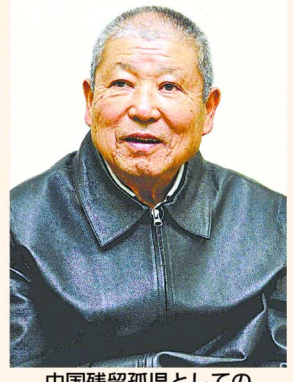
# 祖国での暮らし 苦難の中に光

### 残留孤児

「近所の人は中国人だと思ってる。仕方ないのかな」。中国残留孤児の寺岡満行さん(72)は広島市中区に、中国語で話しますが、身元判明から30年がたちましたが、日本語が話せず間違えられます。しかし悲観せず、自分の人生を受け入れ、前を見据えています。

生後7カ月の1944年、現在の佐伯区湯来町から佐伯開拓団の一員として家族と満州へ渡りました。終戦後、父と姉2人が病死。母だけでは6人の子全員を連れて帰れず、未だ子の満行さんは、子のない中国人の養父母に預けられました。かわいがって母に預けられ、大学にも進学。高校の数学教師になりました。

身元が分かったのは、厚生省(現厚生労働省)の肉親捜しの調査団で来日した86年でした。面会した兄や



中国残留孤児としての体験を話す寺岡さん(撮影・高1中川碧)

## 波乱の人生 前を見据え

寺岡満行さん(72)



身元判明の翌日、古里に帰るため広島駅に着いた寺岡さん(左)。(1986年10月22日)。下は当時の様子を伝える新聞記事

### 子世代(2世)



残留孤児の母と来日してからの苦勞を振り返る松葉さん

## 日本語学習 支援を

松葉静子さん(44)



残留孤児と家族の体験を聞く会で、経験を話す松葉さん(左端)。(2016年12月10日、広島市安佐北区の真亀公民館)

松葉静子さん(44)は広島市西区が故郷の中国山東省から日本に来たのは27歳の時。帰国がようやく実現した中国残留孤児の母(84)と、夫と一緒で、最初は日本語が分からず苦勞の連続。やっと習得しましたが、自分のような働き盛りの残留孤児2世のため「言葉の壁」を境を整えてほしい」と訴えます。

福岡県内の定着促進センターで日本の生活ルールなどを学んで、廿日市市に移り住みました。が、最初家に置いてあったのはストーブだけ。テーブルもなく近所の店も分かりません。妊娠して病院に行っても医師の話すことが全く分からず、最後に「OK?」と聞くしかありませんでした。日本語は広島市内の自立研修センターや、近所の公民館の教室で覚えました。から教わり「質問しても『分からない』とよく言われた。専門教師なら勉強がもっと進んだと思う」。

2007年から残留孤児や家族を支える中国・四国中国帰国者支援・交流センター(南区)に勤め、言葉の壁で就職や育児に悩む人を助けてきました。「日本語ができれば孤立せず人間関係を築き、生活が安定する。経済面以外の手厚い支援も」を望みます。(中1植田耕太)



河本尚枝・広島大准教授

## 国策の悲劇 今なお続く

中国残留孤児を生んだ歴史的な背景や、帰国後の問題を、外国人の社会福祉に詳しい広島大の河本尚枝准教授に聞きました。

満州への大規模な移民は1936年ごろから国策として始まりました。農家の次男や三男、廃業した店主らが「開拓団」として向かったほか、若い男性が国境の防衛と開墾のため「義勇隊」として赴きました。広島県からは1万1千人が移りました。

### 孫世代(3世)



「日本と中国をつなぐ」と抱負を語る中村さん(撮影・中1岩田諒馬)

## 優しい祖父「誇りに思う」

寺岡恵美さん(12)



残留孤児の祖父を「誇りに思う」と話す寺岡恵美さん(撮影・中1岩田諒馬)

白島小(広島市中区)6年の寺岡恵美さん(12)は、数奇な運命をたどった中国残留孤児の祖父満行さん(72)を「誇りに思う」と尊敬します。

小学4年の時、満行さんが学校で、ひもを使って飾りを作る「中国結び」を児童に教える機会がありました。優しく接する祖父を見て、恵美さんは同級生に自慢しました。日本人なのに「中国人」と同級生から悪口を言われることもありました。が、めげません。

6年になり、満行さんの身元が分かった約30年前の新聞記事を読んで、生い立ちを知りました。「こんなすごい人が近くにいるなんて。生きてくれたおかげで自分も生まれた。」「私のおじいちゃん」という題で作文を書きました。

将来の夢はファッションデザイナー。世界を回りながら祖父の体験を伝え、差別のない社会を呼び掛けます。(高1中川碧)

### ひ孫世代(4世)

## 日中をつなぐ懸け橋に

中村成さん(18)

曾祖母が中国残留日本人の広島校が丘高(広島市東区)3年中村成(孫成)さん(18)は、中学3年の2013年3月、10年から広島に住んでいた母に呼び寄せられ、中国から来日しました。話せなかった日本語を必死に勉強して高校に合格。今は大学進学も決め、日本と中国をつなぐ計画を練っています。

広島に来て、曾祖母が日本人で広島にいと、母から初めて聞いて驚きました。日本語は中学で毎日3時間の授業を受け、放課後も休日も勉強。「中国で普通に暮らしていたのに、どうして日本に来て別の言葉を習わなければならないのか。悔しくて布団の中で泣く夜もありました」。

言葉の上達とともに積極的になり、高校では生徒会長を1年半務めました。アドミッション・オフィス入試で長崎県立大(長崎県長与町)に合格。今春に入学します。親身に教えてくれた日本語教師や今の担任のような高校教師になるのが目標です。

長崎では、被爆地を訪れる中国人観光客を案内し歴史を正確に伝えたり、中国生まれの子に日本語や日本のマナーを教えたりたいといます。「多くの中国人が日本に悪いイメージを持っている。誤解を解きたい」。日中の間に立つ境遇を生かします。(高3山下未)